

知的障害特別支援学校における、自然環境との関わりを中心的活動とする 学習プログラムの展開 ～学校田に関わる学習に焦点をあてて～

藤村 彰（京都教育大学附属特別支援学校）

1. はじめに

私の勤務校である京都教育大学附属特別支援学校は、知的障害のある児童生徒を対象として、小学部・中学部・高等部の3学部で教育活動を展開している。本校では、学校内や周辺の自然環境との関わりを中心的活動とする学習プログラムを、小学部から高等部に至るまで多数設定している。そのようなプログラムの中の学校田に関わる学習に焦点をあて、学習題材を整理することと、授業づくりの視点で見たときに、それぞれのプログラムにどのような学習内容が含まれ、どのような意義があるのかを考察し、知的障害特別支援学校における自然環境との関わりのある学習プログラムをより良いものにしたいと考え、本研究に取り組んだ。

2. 研究の方法

- (1) 勤務校で取り組んでいる「学校田に関わる学習」を整理する。
- (2) いくつかの授業において教員が意図的にとった手だてと、児童生徒の様子を示す。
- (3) 提示した授業場面での児童生徒の様子や声を取りあげて、主に次の授業づくりの4つの視点から、学習内容や意義について考察する。
(①生活性を備えた授業、②主体性、能動性を引き出すための興味関心を重視した授業、③課題性をもった授業、④集団性と個別性を内包した授業)

3. 「学校田に関わる学習」の実際

学校田に関わる学習の中の「田起こし」、「田植え（全校朝の会）」、「日常的な学習（天気予報や実際の天気・気温の確認と記入、学校田の水管理）」を取りあげ、教員が授業において意図してとった手だて、及び教員が捉えた児童生徒の様子などの中から、特徴的なものを報告する。手だては、「何を・どれだけ・どのように」するのかがわかりやすくなるようにすること・自己効力感や満足感を持てるようにすることを心がけて、学習集団全体に対して、あるいは児童生徒の実態に応じて個別的にうった。

4. 考察

全校行事である「餅つき大会」に向けての取り組みであり、毎年繰り返し行っていることなので、見通し・意欲を持ちやすく、大変な労力の要する作業・根気の要する作業・協力を要する作業であっても、主体的・能動的に取り組むやすい。そして、自己効力感・満足感を持っていくように感じる。また、高等部の生徒（特に3年生）にとって課題となる心身の健康の保持増進や、卒業後の生活に向けて自信・意欲を持つことにつながる学習であると言える。さらに、教育実習生の参加から、体験的な学習場面は児童生徒との関わり合いの機会を多く持て、経験の共有により共感関係を持ちやすいということを実感した。このことは、通常の小・中学校の特別支援学級と通常学級との交流学习、特別支援学校と通常の学校の交流学习において体験的な学習を設定することの効果・意義を示すと考える。課題としては、設定している活動内容への参加が難しい生徒に対して、充実した学習活動が設定できるように、一人ひとりの実態に応じた目標・活動内容・手だてを検討した上で、学習活動を実施していく体制を整えていくことがあげられる。